

水門町から見た戒壇院



二月堂裏参道で絵を描いておられた方に「東大寺境内で一番お気に入り場所はどこですか？」と尋ねると「水門町の方から見た戒壇院がいい」とのこと。私もさっそく水門町のあたりを歩いてみました。戒壇院は小高い松林に囲まれたひっそりとした御堂ですが階段を下りて奈良県庁方面へ抜ける道の方から振り返ってみると、戒壇院の形が独特で水門町の屋敷や門、屋根がバランスのとれた風景になっています。また東大寺の南大門方面からくる道と交差する付近から戒壇院を背にして泉知事公舎の方を見ても森の風情がいいです。現在の戒壇院は江戸時代の再建です。戒壇院で素晴らしいのはやはり四天王像です。法華堂（三月堂）の仏像と似ており、これらが同じ東大寺系の仏所で造られたのだろうと言われます。

鑑真和上が日本で初めて戒律を授けた戒壇院

東大寺の西にある戒壇院は鑑真和上が日本で初めて僧になるための資格を与える戒律を授けた場所です。私は鑑真和上が関係あるのは唐招提寺だけだと先入観を持っていましたがとんでもないことでした。日本に仏教が伝来してから二〇〇年、大仏殿創建当時、仏教本来の戒律の正式な伝達ができるだけの力量のある僧が日本にいなかった。聖武天皇の勅令を受けた二人の青年僧が入唐し、十年間もの間、指導者を探し求めた末、ついに鑑真和上に会い、日本へ渡航されるよう懇願しました。和上は弟子たちに「誰か法を伝えるために倭国へ渡航する者はいないか」と問いましたが、誰もいなかったため、和上自らが渡航を決意すると二十余人の僧侶が従い、何度かの渡航の失敗の末、日本に到着したのです。このころには和上の目はもうほとんど見えなかったといわれています。



憤怒と激怒の表情の増長天

四天王の中で最も激しい憤怒の表情をしている増長天。戒壇院の天平彫刻は乾湿彫刻ですがその迫力ある怒りの表情や静かな威嚇の表情を彫刻で巧みに表現しています。

これだけの迫力のある表現がされているのですから、モデルもあつたのだろうと想像しますが、よく韓国のテレビドラマなどに出てくる男優の顔が天平彫刻に似ていたりするところを見ると渡来系の顔なのかなあと思います。仏像など、作者があるものは、絵に描いても所詮、まねことの絵なのだと思います。描いてみたいという気持ちが高まりました。



南方の守護神、増長天

東方を守る持国天

東方を守る持国天は足下に邪鬼を踏みつけ、手には武器を持って静かに威嚇するような表情で四方をにらみ据えています。

踏んでいる邪鬼は、もともとインドのヒンドゥ教の民間信仰の神々が仏法に帰依して守護神になったため、かつての自分の姿を踏んでいるという説があったり、目に見えない悪霊の身代わりとして踏んづけているという説があったりします。持国天は帝釈天（たいしゃくてん）の家来で如来や菩薩、明王の守護をしています。



東方の守護神、持国天

目を細めて遠くを眺める広目天

東大寺の戒壇院の内部へ入ると何体かの仏像が立っておられますが、仏教世界の縮図としての須弥壇（仏壇）の四方を守っています。東が持国天、南が增長天、西が広目天、北が多聞天です。戒壇院の四天王像は国宝。奈良の寺院を訪れると、多くの四天王像が見られますが、実に様々な表情をしておられます。

東大寺戒壇院の四天王像は、特に見事な傑作で品格があり、深い精神性を感じます。教典には、四天王は国を守護するとあり、昔、蘇我氏と物部氏の仏教戦争に臨んだ聖徳太子は大阪に四天王寺を建てました。戒壇院の広目天は、遠くを眺める神秘的な視線が女子高生に人気があると聞いたことがあります。



西方の守護神、広目天

毘沙門天とも呼ばれる多聞天

戒壇の四隅に立って中央の多宝塔を守る四天王のうち、前に立つ持国天、増長天の二神は怒りの表情も身体の動きも激しいのに、後ろの広目天と多聞天は怒りを抑えて射抜く様な視線で遠くを見やっています。四天王の中でも特に多聞天は、鬼門にあたる北方の守護神であり、戦勝の神です。また、片手に持っている宝塔から財宝が与えられるというところから別命、毘沙門天とも呼ばれ、七福神の一神にもなっています。生駒信貴山の朝護孫子寺の本尊はこの毘沙門天で大阪商人の参拝が多いといえますし、越後の上杉謙信も毘沙門天を信奉していました。



北方の守護神、多聞天(毘沙門天)



水門町の戒壇院

かつて水門町や東大寺に住んで入江泰吉や須田克太と親交が深かった杉本憲吉は、『絵は感動』『まず描いてみる』ことだね。精神はそのあとについてくる。』『惚れて通えば千里も一里。好きな場所を繰り返し描く。』などと述べています。

このあたり、歩き回るにはいいところ。絵を画くにはちょっと狭いですが・・・